

ベルリンのトルコ系移民とドイツ統一： 調査報告および課題設定の試み

池田昭光

ドイツにおける最大の外国人コミュニティとしてトルコ系住民の存在が知られている。この現象は、第二次大戦後西欧諸国での労働力需要を受け、旧西ドイツ（以下、西独と表記）での労働を目的とした滞在にその起源を求めることができる。トルコ系住民は1961年の西独=トルコ間の協定を期に急増し、1973年までほぼ継続的に増加した。1980年代には子弟の教育、移民集住地区、失業などが西独国内で問題に、さらには1990年代に外国人嫌悪の標的とされたことが知られている。

トルコ系住民をめぐるのは、中東地域研究、ドイツ地域研究、移民研究など様々な領域で研究が積み重ねられてきた。それらの成果のうち、発表者はごく一部に目を通した程度だが、およそその研究動向を把握するなかで、「トルコ人から見たドイツ現代史」については研究が手薄に思われた。とりわけ、ベルリンの壁に注目した場合のことが顕著に見える。1989年のベルリンの壁崩壊や、その後のドイツ統一プロセスは日本でも報道され、多くの人々に知られているが、それらはおおむね「ドイツ人の物語」として受け止められているのではないかと。ところが、当時、壁の近くにはトルコ系移民が集住する地区があった。ならば、壁とトルコ系とを同時に視野に収める試みには可能性があると思われる。彼らにとって壁の崩壊やドイツ統一はどのような経験だったのか。本発表では、こうした背景と着想をもとに、報告者が初めて行った現地調査の一端を報告し、今後の課題を明確にすべく仮説的な視点の提起を行った。

調査は2023年3月の約一週間、ベルリンを対象に行われた。調査課題として、(1) 冷戦期からベルリン在住のトルコ系移民へのインタビューと、(2) 博物館を中心とするパブリック・カルチャーにおけるトルコ系をめぐる表象の観察を設定した。インタビューに際しては日本語=ドイツ語間の通訳を依頼した（トルコ語は未使用）。

課題(2)については、ベルリンの博物館における文化的多様性表象に関する意識的な試みが観察できた。その一例としてフンボルト・フォーラムが挙げられる。これは民族学博物館とアジア芸術博物館のコレクションを中心に展示を行う「博物館」だが、博物館を「越える」試みが追求されており、館の名称としても「博物館」の語が用いられていない点が目を引く。

同施設における中東・イスラーム地域の展示例では、ベルリンに暮らすイスラーム教徒の現在を伝えるものを見学できた。このセクションでは、ナイキ製のスカーフ（女性がスポーツを行う際に邪魔になりにくい配慮がなされている）や、LGBTのイスラーム教徒など、イスラーム教徒を一般的に扱うのではない、特色のある展示構成がなされていた。ただしこれらは「イスラーム教徒」の展示であり、そのなかに含まれているはずの「トルコ系」を明示する扱いはなされていなかった。一方ではベルリンに暮らす他者に焦点を当てつつ、他方ではその人口的比率から言って顕著なケースと思われるトルコ系に焦点が当てられないという、逆説的な一面があるといえよう。

課題(1)については、二名のトルコ系住民へのインタビューに成功した。うち一名につき、ベルリンの壁との接点のあったケースとしてここで言及する。この人物は1955年トルコに生まれ、

1971年に渡独した男性で、劇作家・劇場支配人として活動してきた。自身の演劇活動を一種のソーシャルワークとしてとらえており、トルコ系住民の若者に自身の問題をとらえさせ、そこから作品作りを行ったこともある。ベルリンの壁崩壊時、彼は現場に赴き東ドイツ（以下、東独）からの人々を迎えている。演劇活動とあわせ、社会奉仕や他者との連帯への関心がうかがえる。

他方、この時期のトルコ系住民にとって壁の崩壊は「一種のビジネスチャンス」だったと、実際の面についても述べた。それによれば、トルコ系住民は東独からの人々に食べ物を与え、出世払いでよいからと代金を受け取らなかったが、そこには、親切を施せばその後も客として店に来続けてくれるだろうという期待も込められていたという。インタビューは一度しか行えなかったが、それでも、このように、トルコ系住民からみた冷戦末期の様子がうかがえると言えよう。

ここで注意すべきなのは、ドイツ系内部での区別（西独出身か東独出身か）が意味を持つと、資料自体が示唆することである。インタビューでは、壁崩壊後、東独の企業家への支援が自治体からなされたが、東独の人々の目には、経済的な階層が同程度のトルコ系住民のほうが親しみやすく、西独の人びとが見せる、優越感を伴う傲慢な態度に辟易したとの観察も聞かれた。それゆえに、トルコ系住民と東独出身者との間での共同事業が発展した例もあったという。統一後ドイツにおける東西格差はしばしば言及されるが、そうした格差が顕在化するプロセスにトルコ系住民が登場する例として興味深い資料と言える。

以上、きわめて部分的な調査に過ぎないとはいえ、これらの資料からは、西独・東独・トルコ系の三者の間で、時に社会的・経済的関係が築かれ、時に隔たりが生まれるプロセスが生じていたのではないかという仮説的な視点を作ることができる。本発表の結論としては、これをひとまず「壁崩壊後ドイツの三者モデル」と名付け、今後の継続調査における足がかりとして提起した。

本研究は科研費（20H05826）の助成を受けて行われた。